批判的実在論とリトロダクション／リトロディクション
―複合決定と複線の視点に関わらせて―

木田　融男[i]

批判的実在論（CR 論）において，現象である事象を生成するメカニズムを，本質として同定するリトロダクション（RDu）と呼ばれる科学の方法を考察し，マルクスの『資本論』の方法（MMC）と比較検討してきたが，さらに考察すべき課題として RDu とセットになるリトロディクション（RDi），およびその前提となる考え方である CR 論の複合性／複合決定や複線の視点を，本稿ではより明示化して考察を加える。さらにその上で MMC との比較検討を行うが，とりわけ CR 論の複合決定や複線の視点が，どこまで MMC と重なるのかについて検討を試みている。

キーワード：リトロダクション／リトロディクション，生成メカニズム／因果力，軌範的言明，（水平的／垂直的）複合決定，単線／複線の視点，線形／循環運動

はじめに

今までは批判的実在論 critical realism（以下 CR 論）における，生成メカニズム generative mechanism を同定する科学方法論としてリトロダクション retroduction（遡及，以下 RDu）を探究してきたが，その方法とセットで語られるリトロディクション retrodiction（遡源，以下 RDi）を考察し，両法の確定を行いたい。また RDi を論じる上で複合性の問題が浮上するが，CR 論における成層性を内包する複合決定およびそれと関わる複線の視点を検討し，さらにはマルクスの『資本論』の方法 Marx's method in *Capital*（以下 MMC）との間に存在する論点も明示化する。そして CR 論の RDu ／ RDi および複合性の考え方と，MMC との重なる点や異なる点を比較検討しつつ，社会科学のより展開が可能な方法論を志向する端緒を探索したい。

Ⅰ　検討すべき論点

１．前稿との関連における論点

『立命館産業社会論集，批判的実在論特集』における拙稿「批判的実在論とリトロダクション」では（木田 2016A，以下は前稿），リトロダクション（RDu，前稿では RD）の方法と，MMC との社会科学方法論上の比較検討を行った。そこでは CR 論に理解を寄せるマルクス理論家[1)] であるロバーツの，CR 論の方法およびその具体化である RDu への批判（Roberts, J.M. 2002 §§2 of §1 in Brown, A., Fleetwood, S. and Roberts, J.M. (eds.) 2002），およびそれに対する私自身の見解を提示した。これら二つの方法は，いずれも哲学的な存在論および認識論を基礎にしつつも，社会世界における現象からとりわけその本質を，科学としていかに把捉するかについて言及している。

i　立命館大学名誉教授

(1) 批判的実在論とリトロダクション

RDu の方法を基礎づける哲学である CR 論は，自然世界および社会世界の現象については，私たちが経験できる事象（出来事）event の世界を経験的ドメイン empirical domain として，経験はできないが現実に起こっている事象の世界を現実的（アクチュアルな）ドメイン actual domain として捉える。そしてそれら現象である事象を生成するメカニズム（生成メカニズム generative mechanism）については，実在的ドメイン real domain の本質的世界として捉え，存在論的にはこれら三つのドメイン（領域）が「ドメインとしての成層 stratification」を構成する世界とする[2)]。そして CR 論が考える科学の究極目標とは，実在的ドメインの世界における生成メカニズムをいかに把捉するかなのであるが，経験できる世界あるいは現実に生起している世界の，深層にある「超事実的 trans-factual」な生成メカニズムを探究していく道程を，一つはリトロダクション（遡及，RDu，前稿では RD）とし，もう一つをリトロディクション（遡源，RDi）としており，両法のうち RDu については前稿で扱ったが，それとの関連で RDi については本稿の次章で詳しく概念的な考察を行う。しかしそれに先立って前稿において残された論点について次節に示しておきたい。

バスカーは，『自然主義の可能性』において，（Bhaskar, R. 1979 p.12f.（式部訳 2006 p.13f.））「科学の三局面 three-phase schema」として，①現象の同定 identification，②同定した現象についての説明 explanation の構築，③説明の当否の経験的な検証 empirical test を示し，これら三局面がくり返されるのを科学の方法とする。以上の過程を RDu の前段として，私は前稿では A. RDI（本稿では RDuI）と名づけた。次に，これら三局面のくり返しを経て，現象の深層で作用している生成メカニズムの同定へと至るとするのだが，この RDu の後段の過程を，私は前稿では B. RDII（本稿では RDuII）と名づけた。この後段の過程では，バスカーは超事実的な生成メカニズムを同定するために，この推論を思考あるいは認知的素材（既知の科学理論など）を使用したモデル構築を経ることにより行うとしている。この RDu（RDuI + RDuII）が，果たして MMC と方法論的に同じなのかどうかが前稿におけるテーマであった。

(2) マルクスの『資本論』の方法

一方 MMC は，マルクスが『資本論』で行ったいわゆる下向 forward–上向 backward の方法であるが，前稿のロバーツによれば，まずは現象としてのより具体的な concrete 社会関係 social relation（マルクスでは「混沌とした表象としての人口（Marx, K. 1857-58（高木監訳 1959））」）を抽象化 abstraction（下向／研究の道）していくのだが，（広義の）社会 society，Gesellshaft にそれぞれ経済，（狭義の）社会（sozial = social），政治，精神過程があるとすれば，その中から「経済」総体を抽象（分離して取り出 isolation）し，さらに「経済」総体から資本全般を，資本全般から生産（産業）資本を，生産資本から資本を，・・貨幣を・・そして商品を抽象化するまでに至る。次には元に戻る具体化（上向／叙述の道）を経ていくのだが，商品から始まり貨幣・・資本・・を経て，最終的には「多くの規定と関係からなる豊かな全体性としての人口」（ibid.（同訳））である社会関係へと発展した叙述で終わる。

ロバーツはこういった MMC を，「知（概念）は具体的な現象から徐々に抽象的な本質を把捉できる」というヘーゲル弁証法のマルクスによる批判的な踏襲による方法と捉え，①一つは「認識論的」な循環運動 circular movement（抽象⇆具体の認識における循環）であるとするが，②あわせて MMC は「存在論的」な循環運動（商品⇆資本の存在における循環）であるともする。（Roberts, J.M. op.cit.）[3)]

２．リトロダクションをめぐる新たな論点

(1) ロバーツのリトロダクション批判

2002年に公表されたロバーツの論文は，「RDu と MMC とは同じではない：RDu ≠ MMC」という見

解を示した。(ibid.) 理由としてはバスカーの方法をヘーゲル弁証法の批判的継承が弱いという基本点に置くのだが，その上で以下の理由により MMC は RDu とは違う方法だとする。すなわち，ヘーゲル弁証法を踏襲した，MMC のいわゆる下向⇄上向いいかえれば抽象⇄具体の双方向的な循環運動 circular movement を，RDu の方法は持ってはおらず，抽象的概念のモデルから一方向的に具体的現象へと進む線形運動 linear movement であり，MMC とは違うとロバーツは論じたのである。(ibid. p.32f.)

(2) ロバーツに対する私見

対して私は前稿で「RDu は MMC とほぼ同じ方法である：RDu = MMC」という見解に立ち，次の根拠を提示した。比較の前提として，RDu を，A. 抽象⇆具体（MMC の下向⇆上向）にあたる RDuI と，B. モデル構築（アブダクション（仮説推論法）abduction[4]）にあたるものを RDuII と二分化して考察した。その上で，ロバーツの RDu 批判に対して私は次の見解をとった。

A. RDuI について：バスカーの「科学の三局面」の第二局面の「現象についての説明の構築」が抽象化にあたり，第三局面の「説明の当否の経験的な検証」が具体化にあたるとするセイアーの見解 (Sayer, A. 2nd. 1994 p.87) にあるように，RDu の前段の方法は，抽象⇆具体（MMC では下向⇆上向）で把捉されており，したがって，RDuI = MMC として両法は同一だとした[5]。

B. RDuII について：MMC には，バスカーのように実在的ドメインとしての生成メカニズムを同定すること，およびそれを抽象⇆具体だけではなく，想像や創造という思考を経たモデル化などの手法により仮説的に推論する（アブダクション abduction）などの方法論上の明示化はないが，『資本論』に提示されている資本制を説明する本質的な諸概念（商品・貨幣・資本および剰余価値など）は，資本制を生成する実在的なメカニズムに当たる概念であるとし，RDuII ≒ MMC とした。

(3) バスカー『弁証法』が示す新たな論点

さてロバーツが，「バスカーの RDu はヘーゲル弁証法の批判的継承に難点」と批判した論文は2002年に公表されているが，バスカーは2008年（日本での式部訳は2015年）に，ヘーゲル弁証法をふまえた全面的とも思える大著の『弁証法』を表している[6]。その著では前述の論点への言及はないものの，ロバーツが提示した RDu 批判の内容に関わる箇所が散見されるので，本稿の論題に重なる点のみ見ておきたい。

A. ヘーゲル弁証法をめぐる論点：知の認識論

バスカーは『弁証法』の中で，マルクスのヘーゲル弁証法の継承について，一方で「合理的核心 rational kernel」としての肯定的な継承と，「神秘的外殻 mystical shell」としての否定的な継承とに分岐させて論評しているが，関わる点で中心となるのは認識の方法に対するものがある。すなわちヘーゲルからマルクスへの弁証法の継承であるとロバーツは評価し，「知は本質を把捉できる」という認識論でバスカーの RDu を批判した点については，バスカーは『弁証法』で次のように論じている。すなわちマルクスの唯物論 materialism が，知の本質をヘーゲルにおける「絶対精神」から「生産様式など物質的なもの」に転倒させた点は認めるが，その認識論についてはともすればマルクス理論において「素朴な反映 reflection」論[7] になってしまった「否定的なヘーゲル弁証法の継承」であると論及している。そしてバスカー自身は「真理論」として，一方では，真理とは実在との一致とする「(知は) 実在の反映あるいは隠喩」とするマルクス理論家のもつ客観的経験論の欠陥と，他方では，真理評価の基準は人間の実践とする「(知を) 主体の実践的表現」とする西欧マルクス理論家たちの弱点との，両者を克服する「弁証法的 CR 論」への志向を提案する。(Bhaskar 2008 p.216f.（式部訳 2015 p.337f.))

このバスカーの提示が，単純な反映論ではなく，知すなわち概念に基づく人間主体による思考を有した客観的な実在を把捉するという意味であるのか，

また人間主体の実践が実在の真偽を評価するという実践論ではなく，「実践と理論とを実践において統一する」（ibid. 同訳）という彼の『弁証法』で語っている視点を意味しているのか，など極めて大きい課題を抱えており深い認識論に関わる考察を必要とするが，論点のみをここで確認してバスカーの当著の全体的検討をふまえた今後の論議課題としたい。

B. 循環運動の論点：RDuⅠとの関連

ではロバーツがRDuを，「循環運動でなく線形運動だ」と批判する点についてはどうであろうか。MMCでは実在の認識について，下向による分析がもたらす抽象は，実在へと近づいているある種の知／概念として捉えられ（バスカー「科学の三局面」の第二局面である説明の構築），これが上向による綜合によって具体的な現象を説明していく（同じく第三局面である経験的な検証）過程であり，より実在に近い知／概念へと認識を深めていく下向（抽象化）と上向（具体化）との往復運動（循環運動）であると考えられるので，先述の私論で語っているようにMMCの下向／上向法は，バスカーの「科学の三局面」の方法と同じであり，RDuI = MMCといえよう。ロバーツがいうMMC＝循環運動の視点から見れば，RDuIも認識論的には循環運動といえよう。

ただし，MMCはさらに存在論としての資本制内部の客観的な運動を，獲得された知／概念（商品・貨幣・資本および剰余価値など）によって，存在論的にも循環運動として捉え得るという方法論的特徴をもっている。すなわちそのように知／概念がいったん提立されたならば，存在論的にも「商品⇆資本」という資本制の再生産＝循環運動が叙述されるということとなり，その運動についてバスカーのRDuではどこまで把捉できるのかについては，前稿においてあまり明示的には確認してはいない。ちなみにロバーツがRDuを線形運動だと批判したのはこの点でもあり，すなわち実在と遊離した（抽象⇆具体の認識論的循環運動が不十分である）「観念」のみによる思考の「モデル化」が創り上げた生成メカニズムならば，そこから照射された現象（事象）は下手をすると一方的な説明となってしまうとする。そして経験的検証とならない仮想としての知／概念の一方向（線形運動）的な把捉となり，実在の循環運動は捉えられないか，捉えても線形運動でしかないとする。

バスカーは，『弁証法』の著を執筆した一つの動機として，運動／変化を把握する方法をより展開したいと述べているが（ibid. 同訳），この点が当著でどこまで把捉されているのかは，やはり今後の論点であるが，その前提として検討されなければならない課題について最終章で私見を提示しておきたい。

C. モデル構築の論点：RDuⅡとの関連

では，ロバーツに対する私見のうち，RDuII ≒ MMCすなわち，RDuIである抽象⇆具体（CR論では科学の三局面）を繰り返したのち，実在としての超事実的な生成ドメインそのものを導出するRDuIIの方法についてであるが，前述した想像的／創造的なアブダクション（仮説推論法）ともいえる思考によるモデルをあらかじめ構築して導出していく手法である。

この手法をロバーツは，事実から遊離して構築されたモデル化仮説としての生成メカニズムとし，その仮説が行う経験的な検証としての説明過程は，一方向的な（すなわち線形運動的な）性格しかもちえないと批判したのであった。しかしながら，MMC自体からは，後述の決定因（生成メカニズム）にあたる概念（商品・貨幣・資本および剰余価値など）が提示されている。これらの概念が決して，CR論でいう経験的ドメインや現実的ドメインのものではなく，実在的ドメインにあたる概念といえることは前稿で示してある。（木田 前稿／木田 2016B）MMCにおける生成ドメインにあたる概念については，後述する複合決定や複線の視点をMMCにも適合し得るのか否かを考察しなければならないので最終章で考察するとして，生成メカニズムに近似的に該当する概念がMMCに存在はしている。ではマルクスはこういった実在的ドメインにおける性格を帯びる概念を，いかにして同定したのであろうか。

バスカーは，生成メカニズムにあたるモデル化仮説のような概念の作成について，前記したように既知の認知的素材やモデル構築を駆使して実在を把捉する方法と語っているが，私たちの研究の出発点である先行研究のレビューから研究課題を引き出す一般的手法といえるだろう。そうだとすれば，マルクスにも例えば「剰余価値」概念については，『資本論』第4巻とも称される『剰余価値学説史』が公刊されているように，膨大な先行研究の後に「利潤」という経験的レヴェルの概念に対して「剰余価値」という，この概念で資本制の秘密が解明されると称されるほどのマルクス独自な視点をもつ概念が索出されたのであり，まさしくバスカーのいう認知的資源からのモデル構築にあたるものなのではないか。ただしマルクスは当概念の同定についてはRDuに該当する方法論として明示化はしてはおらず，MMCに必要な研究者の資質として「抽象化の能力」（Marx, K. 1867）は指摘したのだけれども（この資質はRDuIに必要な能力であろうが），RDuIIに必要な「想像性／創造性の能力」（Danermark, B. et.al. 1997（佐藤訳 2015））については語ってはいない。したがって私見ではRDuII ≒ MMCとしたのである，この論点の考察に関わっても残る今後の課題としておきたい。

D. 複合性の論点：RDiとの関連

バスカーは，MMCあるいはマルクス理論がもつ理論課題として複合性complexityに関わる問題を『弁証法』で語っている。すなわち，決定論や還元論に対する複合性論に関わって多重性／多元性multiplicityもしくは複数性plurality，および成層（階層）性stratificationの問題，そしてロバーツが提起している（一方向的）線形linear運動／（双方向的）循環circular運動に関わっては，単線uni-linearの視点／複線multi-linearの視点の問題をバスカーは逆に提示している。

マルクスあるいはマルクス理論が「単一の経済決定論」ではないかという，常に浮上する争点についてバスカーは，マルクスがヘーゲルのポジティヴな合理的核心を継承しながらも，逆のネガティヴなヘーゲルの神秘的外殻を内在させている問題への批判を率直に表明している。そこでは，原因が複合状況下での多重性conjunctive multiplicity（訳では「連言的多重性」）の場合と，非複合状況下での多数性disconjunctive plurality（訳では「選言的複数性」）の場合とをマルクスは混乱し，前者では折衷論eclecticismを避けるため決定論に陥っていることや，後者では明確な一本線a clear lineの発展経路を描こうとしつつも突然変異mutationの可能性を残すことなどの問題を指摘している。（ibid. p.347f. 同訳 p.533f.）　そしてバスカーは，基本的にはマルクスが地歴史的所産geo-historical outcomesに作用する「決定の多様性manifold」（「複線的（多元的）multi-linearな歴史理解」）を認めていたこと（ibid. p.348（同訳 p.534）），また「原因の複数性」や「統合的integrative（不均衡にasymmetricallyに構造化された）多数性論pluralismの発展」（ibid. p.350（同訳 p.538））に強い関心をもっていたこと，さらにヘーゲルのポジティヴな合理的核心として「（準）存在論的成層化（quasi-）ontological stratification」を継承していることを，（ibid. p. 344（同訳 p.529））具体的なマルクスの文献なども紹介して提示をしている。その上で，MMCに関わってバスカーが指摘しているマルクスがヘーゲルの神秘的外殻に陥ってしまった例示も参照しつつ，まずは本稿でCR論のリトロダクションや複合性を考察した上で，最終章ではMMCに沿いながら私見も提示しておきたい。

複合性の問題といっても，マルクス理論における複合決定の問題その中でも「階梯としての成層」に関わる「垂直的複合決定」などについては，CR論とは重なり合うところが大きいように思えるのであるが，マルクスの単線uni-linearの視点といわれる弱点については，バスカーはそれがマルクスへの直接的な「不満」ではないといいつつも，複線的（多元的）multi-linearな視点からのMMCへの批判については，手厳しいものがある。そしてロバーツからはバスカーあるいはRDuについて，循環運動ではな

く線形運動であるという批判がなされ，他方バスカーからはマルクスあるいはMMCについて，複線の視点ではなく単線の視点であるという批判がなされているという論点を確認しておき，やはり後段でMMCとも関わらせながら検討し私見を加えたい。

Ⅱ　リトロダクション／リトロディクション，そして複合性

本章でまずはRDu／RDiについて諸論の検討を行い両法の確定をしておきたい。その上で，RDiにおいてCR論の重要な特徴とされる複合性／複合決定および複線の視点に関わる問題があるので考察していきたい。

１．リトロダクション／リトロディクション

CR論におけるRDuの方法と関わって，リトロディクションretrodiction（遡源，RDi）の方法が存在するのだが，CR論にあってこの方法を取り出して考察されている文献をあまり見かけないので，本節ではRDu／RDiの両法を重ね合わせて定義のみではあるが，バスカー，ローソン，エルダー=ヴァスの諸定式を紹介し検討していく。

(1) バスカーのリトロダクション／リトロディクション

A. バスカー（1979）のRDu：彼がRDu／RDiの提唱者であるが，『自然主義の可能性』において，（Bhaskar, R. 1979 p.12f.（式部訳 2006 p.13f.））前述したように科学の三局面（three-phase schema）として次のように提示している。

①現象を同定 identification
②現象について説明 explanation を構築
③説明の当否を経験的に検証 empirical test

そして，「この三局面を経て現象の深部で作用している生成メカニズム generative mechanism の同定へと至る」とするが，ここで同定された実在的ドメインの生成メカニズムこそ，RDuが探究の目的としたものである[8)]。

B. バスカー（1975）のRDi：RDuよりは先んじて，『科学と実在論』に出てくるが（Bhaskar, R. 1975 p.125（式部訳 2009 p.157）），基本的な定式は下記のようになる。

①事象をその構成諸要素に分解 resolution
②構成諸要素を新たに再記述 redescription
③再記述された諸要素や事象の可能な諸原因への遡源 retrodiction（式部訳では，遡言あるいは遡行）
④可能な諸原因を主因への絞込み elimination

ここでのRDiの特徴は，開いた系 open system であることから事象を複合性と捉えていることであり，その事象を構成諸要素に分解し，それぞれの因果的な諸力（諸原因）を複合的に導出している。さらにそれら諸力の主因（一つあるいは複数）に絞込む。

C. バスカー（1986）のRDu：後に定式化された彼のRDuとRDiであるが，CR論への導入書である『社会を説明する』（Danermark, B. et.al. 1997（佐藤監訳 2015 p.309, p.318））の「用語集」において両法が解説されているので紹介しておく。RDuはそれぞれの頭文字を取りDREIと定式化され，（Bhaskar, R. 1986）理論的な説明過程とされている。

①法則類似の振る舞いについて記述 Description
②諸現象との類比を用いてその振る舞いの可能な説明を探求＝遡及 Retroduction
③遡及された可能な説明の諸選択肢を点検し精査 Elaboration
④最終的に作動している因果メカニズムを同定 Identification

上記のRDuに比べて，類似の動きをする一つの現象を扱い，一つの因果メカニズムが同定されており，複合的な事象を対象とはしていない。①に「法則」とあるのは，持続的で規則的な類似の現象を指している[9)]。

D. バスカー（1994）のRDi：やはり頭文字からRRREと定式化されたRDiであり，コリアーにより紹介されている。（cf. Collier, A. 1994 p.163）実践的で応用的な説明過程とされている。

①複合的現象を基本的な諸要素に分解 Resolution

②諸要素について理論的な枠組みによって再記述 Redescription

③再記述された諸要素が軌範的言明を通じて可能な先行する諸原因に遡源 Retrodiction

④溯源された可能な諸原因の諸選択肢を精査し，最も重要な原因に絞込み Elimination

③にある原因への遡源に使われる軌範的言明 normative statement とは，開いた系にも閉ざされた系にも通底している超事実的 trans-fact な傾向性 tendency を示し，すでに RDu により同定された先行の研究理論のことである。この既知の理論（軌範的言明）の使用は RDi の特徴であろう。

(2) ローソンのリトロダクション／リトロディクション

ローソンは CR 論から把捉した経済学の方法の書を公刊しているが，（Lawson, T. 1997（八木監訳 2003））その中で「二つの説明」として両法を対比し，RDu は理論的説明に用い，類推的（類比的 analogical）で遡及的であり，対して RDi は応用的説明に用い，解析的（分解的 resolutive）で遡源的であるとする。（ibid. pp.220-1（同訳 p.248））そして「二つの基本モデル／シェーマ」を下記のように定式化している。（ibid. p.243（同訳 p.272））

A. ローソンの RDu：彼は RDu を，純粋（理論的／抽象的）説明としている。

①ゆるやかな規則性の記述

②メカニズムが遡及され仮定としての理論（説明）の構築

③説明が精査され経験的根拠を下に絞込み

④因果メカニズムの同定，次にそのメカニズムの現象を説明

バスカーの RDu の定義に比べて，同定（記述）する現象を「ゆるやかな規則性」としていること，また遡及した因果メカニズムを「仮定としての理論」としていること，そしてその理論（説明）も複合的に扱い精査／絞込みをしていること，さらに同定されたメカニズムは，次の段階では説明される現象として扱っていることの特徴がある。

B. ローソンの RDi：彼は RDi を，応用（実践的／具体的）説明としている。

①複合的な諸事象／状況を別々の構成諸要素に分解（別々の諸決定因の効果に分解）

②構成諸要素を意味ある理論枠組で再記述

③傾向的言明 tendencious statement を可能な先行する仮定としての説明（遡源）に使用

④複合する諸原因（諸説明）を経験的根拠を下に絞込み

同じくバスカーの RDi の定義に比べると，分解された諸要素それぞれが「諸決定因」をもつとしていること，バスカーの軌範的言明という用語が「傾向的言明」とされ，遡源するために使用されるのだが「仮定としての説明（理論）」とされていること，原因が複合的に扱われているのは同じであるが，それらの絞込みを「経験的根拠を下に」とされていることが特徴である。

(3) エルダー=ヴァスのリトロダクション／リトロディクション

エルダー=ヴァスは両法を，「２つのあい異なる相補的な科学活動」として上記のローソンに依拠して下記のように定式化している。（Elder=Vass, D. 2012 p.17）

A. エルダー=ヴァスの RDu：「CR 論が RDu と呼んでいるもの（ibid.）」とされている。

①単一の因果力を同定

②その生成メカニズムを説明

バスカー，ローソンの定義に比べ，同定される因果力は単一と明示されている。因果力は，それが生成するメカニズムと別のものとして扱っているのが特徴であろう。

B. エルダー=ヴァスの RDi：同じく「CR 論が RDi と呼んでいるもの（ibid.）」とされている。

①単一の事象を考察

②事象／その要素群（set）の原因として相互作用する因果力群を同定

③事象／その要素群の原因として因果力群に働く相互作用を同定

考察対象である事象は単一であるが，その要素は複数の群 set（セット）とされ，また同定される因果力も複数の群（セット）とされているが，併せて要素群（因果力群）の相互作用も同定される。因果力群や相互作用の遡源に軌範的言明が使用されるのか，またそれらが絞込みされるのかは示されていない。また彼の特徴であるが，RDu と同じく因果力は，生成メカニズムと別のものとされている。

(4) リトロダクション／リトロディクションの確定

それぞれの定義を見てきたが，これらから両法について定義の確定をしておきたい。

A. RDu の確定：単一／複数の事象を生成させている原因となる単一の力（因果力，生成メカニム）の説明（理論）を，抽象化／理論化により遡及し，事象における経験的な検証を行う。

B. RDi の確定：単一の事象を複数の構成要素に分解し，それぞれを生成させている原因となる複数の力（因果力，生成メカニズム）の説明（理論）を，既知の理論（軌範的言明）により具体化／応用化して遡源し，単一／複数の説明（理論）の絞込みを行う。

とりわけ RDu は，多くの場合単一の生成メカニズムを新しく探究し同定していく作業なのだが，RDi は，一つの事象であってもそれを複合性と捉え，要素およびそれぞれの因果力も複数として捉え，場合によれば群（セット）として複合決定により生成されるとも捉えており，複合性／複合決定という大きな前提がある。

最後に，これら両法の簡単な使用例を見ておきたい。

〈ローソンの事例〉

A. RDu の事例：科学者が動物の感染病（例，狂牛病）の原因を探究するのに，類推的（類比的 analogical）な説明を構築するのであり，今までは動物の不調に対応したウイルスの発見がたびたび行われてきた類推から，狂牛病に対応した新しいウイルスを遡及していくとされている。

B. RDi の事例：天候パターン X の原因を探究するのに，既知の因果メカニズム諸理論の中から，特定の結合した因果メカニズム Y を遡源していくが，そのための条件がそろっているのか，現実に発生するのかについて経験的な検証が必要である，と紹介されている（Lawson, T. op.cit. p.221（八木 前掲訳 p.248））。

２．複合性の問題

RDi と関わって複合性 complexity（多重・多元性 multiplicity，多数性 plurality）の問題は，CR 論にとっての大きな特徴を表すテーマであるし，また MMC との対比に関わっては，前章で見たようにマルクス理論への批判との関わりでも，重要な課題であるといえよう。ここでは CR 論の複合決定あるいは複線の視点を私なりに整理した形で検討したい。

(1) CR 論における複合性

CR 論により自然あるいは社会の世界を把捉する点での大きい特徴は，複合性の問題であり，それはまた大きく前節の RDi に関わる複合状況 conjunction における複合決定 complex determination（複合因果力）の問題であり，それと関連しつつ歴史などにおける複線 multi-linear の視点の問題でもあろう。バスカーは，複合状況下での conjunctive，互いに相互作用し合う，結合し合う関係性（訳では「連言」）にある作因の集合を多重性／多重決定（因果力）とし（連言的多重性 conjunctive multiplicity），非複合状況下での disconjunctive，相互作用がない，結合がない場合（訳では「選言」）にある作因の単なる集合を多数性／多数決定（因果力）としている（選言的多数性 disconjunctive plurality）（Bhaskar, R. 2008 p.348（訳 p.534））。以下ではまずは CR 論における複合性／複合決定の問題を考察していく。

バスカーの『科学と実在論』で語られている「複合決定」では，（Bhaskar, R. 1975 p.110f.（式部訳 2009 p.138f.））開いた系 open system である世界の

日常的事象は，一度に多数の異なる原則による支配がなされているとし，完全なる事象の説明とは，その生起に関与したあらゆる程度の異なる原則について解明することであると記している。したがって，人間というのは一度にさまざまな原則から行動規制を受ける全体的存在者であるとも述べ，その考え方を「複合決定の理論」としている。そしてこういった世界の事象の複合性を認めることが，逆に人間の行為者性 agency がもつ自由とは両立しうるのだとし，複合的な原則の支配に服しながらも，人間は純然たる自己決定を行えるし，合理的計画に基づいて活動できるとする考え方を示している。人間，自由のテーマについてはここでは展開しないが，（ちなみに，ロバーツはバスカーとマルクスとの弁証法による「自由」の捉え方の相異を記している。Roberts, J.M. 2002 §12 in Brown, A. et.al.(eds.) op.cit.）以下ではCR論の複合的な生成諸メカニズム（因果諸力）の決定について見ていきたい。

(2) 開いた系における複合決定

世界を閉じた系 closed system ではなく開いた系として捉えるならば，そこは無数の偶然性が存在する世界であり，必然的な確固とした規則性（法則）で繰り返される閉じた世界は，自然科学で人工的に作製される実験の世界にしか実在しない。そうであれば，事象を生成するメカニズムを RDu により導出したとしても，そのメカニズムは，必ず当の事象を生成する法則とは言えず，にもかかわらず世界に事象が存在する限りその事象を生成するメカニズムとしては傾向性 tendency として実在する，と CR 論は捉える。このように見られる世界は，大多数の事象が開いた系で生起するので「複合状況 conjuncture」として捉えられ，そこでは複合的なメカニズムがさまざまな結果を生起させていくのである。（注の⑨を参照）

バスカーは，複合的なメカニズムを「二つ以上の大きく異なる種類のメカニズムが結合して効果を生み出すこと」と記している。（ibid. p.119（同訳 p.150））これら複合決定をもたらすものは開いた系では偶然性と考えられ，例えメカニズムが閉じた系では必然的な単一の客観的因果力であったとしても，次のように実際は偶然的な複数のメカニズムが生起することとなる。すなわちメカニズムの①作動以前であれば，行為者の（発動するか否かなどの）意図が，②作動途中であれば（遮断するか否かなどの）条件や環境が，③作動以後であれば（結果するか否かなどの）条件や環境が幾多にも関与し，必然的にある一つの事象が生成するとは限らないこととなる。（Danermark, B. et.al. op.cit. pp.55-6（佐藤 前掲訳 pp.87-8））

さて，開いた系による複合状況を前提にするとしても，生成メカニズムにおける複合決定（複合因果力）の点から考察すると，CR論の中心を占めるその考え方は，従来の社会科学において，「経済決定論／経済還元論」の問題として，MMC を含むマルクス理論との関連において論点の一つともなってきたのであり，後に検討するが，その前に CR 論に関連する重要な特徴を持つ成層性 stratification（階層性）という見方から複合決定の問題も取り上げておく。

一つは既に示した三つのドメインから「ドメインとしての成層性」と，もう一つは「階梯 hierarchy としての成層性」すなわち下位の成層に決定（逆に言えば説明的還元）されながらも，独自の創発性 emergency をもつ上位の成層という意味の多重的成層性である[10)]。次からは，前者の成層で実在的ドメインの生成メカニズムにおける複合決定を「水平的」複合決定とし，後者の成層で階梯としての諸成層における複合決定を「垂直的」複合決定としてそれぞれ見ていきたい。

(3) 水平的複合決定

A. バスカーの複合決定

生成メカニズムや因果力などと一括して述べてきたが，実は実在的ドメインを構成するものとして，構造 structure，関係 relation，（生成，因果）メカニズム mechanism，（因果）力 power，そして傾向性

tendency などがあり，これら概念がどう関わるのかについてあらかじめ見ておきたい。これは一つのメカニズムの中に，それが例え必然的な（より厳密に言えば傾向的な）ものであれ，偶然的なものであれ，必ずや複合的な構成諸要素が存在することを示している。

バスカーは，前掲の『科学と実在論』において「実在的世界の秩序に適用しうる必然性概念」として，次の三つをあげている（Bhaskar, R. 1975 p.171（式部訳 p.217））。

①生成メカニズム：事象を結合させる必然性 necessity

②自然的必然性 natural necessity：法則概念（①の必然性）に内含する必然性で，生成メカニズムの作用 activity，もしくは傾向性 tendency

③自然種 natural kinds：②を派生する事物の実在的本質概念に内含する必然性で，それらの特性 property もしくは力 power

ここから，生成メカニズムの構成としては，①である生成メカニズム（因果メカニズムと同意）があり，そして②は，①の内部に生成メカニズムの作用もしくは傾向性があり，③では，②を派生する特性もしくは（因果）力があり，③の特性にはそれ固有の構造あるいは関係があろう。したがって実在的ドメインにおける生成メカニズムの世界の内部自体も複合的だといえよう。

また下記の**表－１**では，バスカーが水平的複合決定の具体事例として，第二次世界大戦が始まる頃の，イギリスにおける複合的な歴史叙述をとりあげているので掲載しておく。この歴史的説明は，上記で取り上げた開いた系における複合決定の例でもあるし，また前節で取り上げた DRi の例ともなる（ibid. p.122f.（同訳 p.154f.））。

ここではロイド・ジョージ当時の英首相による，戦争目標策定の経過における「複数の異なる説明連鎖 explanatory linkages が合成されてできる一種の凝縮態 condensation（ibid.（同訳））」が分析されているが，複合的な原因群や先行の結果が次の原因となり，それら原因の複合性により次々と結果が変わっていく様相が示され，原因群あるいは結果群が相互作用しつつ，結果に対する水平的な複合決定（時間軸の変化による歴史経過は含まれている）が見られるのである。ただし，存在論的統一性の欠如として，産業労働者とウイルソン大統領の姿勢が同じ説明文で並立していると注釈があるが，ここでは成層論による垂直的複合決定としては把捉されていないという意味なのであろう。

B. エルダー=ヴァスの水平的複合決定

エルダー=ヴァスは，自分の仮説である「規範サークル norm circle」が文化諸事象を決定する事例を次のように展開している。（Elder=Vass, D. op.cit.）彼は複合決定を，複合（多重）因果力とも称しており，とりわけそれら複合因果力の相互作用が，生成メカニズムを形成するとしている。具体例として（狭義の）文化，言語，言説，知識はすべて，エルダー=ヴァスが提案する規範サークル norm circle（以下 NC）によって生成されているとする。NC とは，因果的効果（因果力）をもつ社会構造であるが，その因果力は単一ではなく，多数の因果諸力の相互作用により複合決定されているとする。そして NC の実際のメカニズムが作動する時にそれを組成する構造となるのであるが，以下のもので構成されるとし

表－１　イギリス歴史叙述による複合決定の事例

原因群―Ｌ：労働党／産業労働者の圧力
　　Ｗ：ウィルソン米大統領の姿勢／結果 Ec の原因にも
　　Ａ：欧州連合諸国の条約遵守事項による拘束／結果 Eb の原因にも
結果群―原因群 {L, W, A} →結果 Ea：ロイド・ジョージ英首相による戦争目標の策定／結果 Eb の原因にも
　　原因群 {Ea, A}　→結果 Eb：彼の曖昧な形での戦争目標の策定／結果 Ec の原因にも
　　原因群 {Eb, W}　→結果 Ec：彼の結局は曖昧だが14ヶ条とも整合的な戦争目標策定

ている（ibid. pp.15-7）

①パーツ（parts）の群（セット）

②パーツがもつ多数の因果諸力

③パーツの間の諸関係（相互作用 interaction）の群（セット）

ここで，パーツとは個々の人間にあたるのであるが，個々の人間は文化などを個々に生成する因果力を各々に有している。しかしそれらパーツ（人間たち）の多数の因果諸力が，相互作用（＝諸関係を構成）するなかで，単一の創発的な生成メカニズムが，（狭義の）文化，言語，言説，知識を創り上げていくとするのである。エルダー=ヴァス独自が想定する生成メカニズムをアブダクション（仮定的推論）して，水平的な複合決定論による NC という同定を行っているといえよう。（これは RDu であるが，自説を含む諸論を比較検討し，自説が妥当だとして絞込み同定したのであれば，RDi であろう。（ibid. p.37f.））　ただし，NC 論は複合的な因果諸力の相互作用によるものではあるが，最終的には「単一」の NC による決定という意味では複合決定論ではないのでは，という疑問もあるが今後の考察課題としたい。

(4) 垂直的複合決定：成層性

A. バスカーの成層性と垂直的複合決定

バスカーは，CR 論では世界を成層（階層）stratification として捉えるのであるが，三つのドメインである「ドメインとしての成層性」が一つのまとまった層（階梯）として存在し，次にはそれら諸層が重層性を形成する「階梯としての成層性」として捉える。階梯における下位の成層の生成メカニズム／因果力が上位の成層を生成するが，上位の成層が下位の成層に還元されるわけではなく，ただ「説明的還元」が存在するのみであり，重要なことは上位の新しく生成された成層には，独自で質的に異なる特性が創生され，それ自身の生成メカニズム／因果力をもつこととなり，この新しく生成された上位の成層が有する独特な存在の始まりは「創発性 emergency」と称される。こういった創発性を有する階梯としての成層性の考え方が複合性の捉え方となっている。（Danermark, B. et.al. op.cit. p.59f.（佐藤 前掲訳 p.95f.））

まずは，一つの上位の成層の成立そのものが，下位における複数の諸成層から生成し，さらにそれらの生成に重なって上位の成層自身も新しい創発的特性をもつのであるが，新しい上位の成層それ自体は複合的な構成をとることとなる。この成層性がもつ重層性は次に見るコリアーの垂直的複合決定の考え方につながるのである。

B. コリアーの垂直的複合決定

マルクス理論の発展を CR 論から志向するコリアーは，「（物質的／経済的）土台」と「（政治的／イデオロギー的）上部構造」の問題を，CR 論の成層性から展開する複合決定についての新たな提起を行った。まず彼が理論対象としたのは構造主義的マルクス理論と称されるアルチュセール（Althusser, L. “Reading Capital, trans. Brewster, B.” New Left Books, 1970）だった。その考え方は，従来の「経済単一決定因」を二つに分岐させ，一つは「支配因 dominance」とし，もう一つは「最終審級 last instance」論で有名となった「（最終）決定因 determinance」とする。前者の支配因は時々の社会的な事象や制度に支配的な影響を与える諸力であり，時々に様々な諸作因が考えられ複合決定の様相を示している。他方，後者の（最終）決定因は，その様々な諸支配因のどれが，時々に主要な支配的影響力を与えるのかを，まさに最終審級として決定する作因であり，マルクス理論では経済的な作因（経済因）がそれであり単一な「経済決定」論といわれてきたものである。アルチュセールの考え方をこれら両作因から見れば複合決定論であるが，後者の作因のみ見れば単一の経済決定論であろう。（Collier A. 1989 p.51f.）

この考え方を CR 論の成層論を通して捉え直したのが，コリアーの水平的 horizontal ／垂直的 vertical 複合決定論（コリアーの用語では「水平的／垂直的説明 explanation（因果性 causality）論」）といえよう。

まずは「ドメインとしての成層」から捉えると，事象（経験ドメインと現実ドメイン）における活動を支配している複数の因果力が複数の支配因となり，それら因果諸力による複合体が水平的複合決定をするということとなる。そしてこれらパーツ（因果諸力）のどれかが，「決定的」な役割をもつという考え方はとらない。時代や地域の相違により，政治的なものが（変革の時代），宗教的なものが（北西ヨーロッパの宗教改革），経済的なものが（前期資本主義国），イデオロギー的なものが（社会主義国），社会全体における支配因としての役割を果たすと見るのである。（ibid. p.58f.）

しかし，それまでのアルチュセールなどのマルクス理論にない発想として，コリアーはCR論における「階梯 hieralchy としての成層」，すなわち垂直的複合決定の考え方を取り入れる。すなわち因果諸力（生成メカニズム）を，例えば政治因・イデオロギー因・経済因などとすると，それぞれが創発性をもつ別個の階梯としての成層と捉えるのである。そして各成層間の階梯を見ることにより経済因が，物質に近いという意味で，一番下位の成層と位置づけられる。そしてこの下位の成層である経済因が，他の成層（政治因やイデオロギー因など）の「説明的還元性」をもつものとして（決して経済因に還元できるという意味ではない）位置し，他の成層の成立の基礎づけの条件となるのであるが，無論のこと他の成層はそれ自体が創発性を有することから，経済因からの一方的決定を受けるわけではない。したがってそれぞれの因果諸力は全体として複合決定しているという考え方は，水平的複合決定とは変わらない。ただしその複合決定の，基礎づけとなる条件を与えるのが下位の成層である経済因だということになり，その意味で垂直的複合決定と呼ぶのである。コリアーはこの例として，資本主義が未発達という条件を意味する経済因が，旧ソビエト社会主義において，当時の農民層や知識人層に新しい思考を生成するイデオロギー因が支配的にならない基礎条件としての「決定因」だったのだとしている。また資本主義の高い発達という条件を意味する経済因が，ジェンダー的なイデオロギーという支配因を芽生えさせる基礎条件としての決定因でもあったとしている。これらはいずれも，社会主義や資本主義という経済因が，特定の思考／行為様式を生成させるのではなく，経済因とは別個のイデオロギー因など（例えば，社会主義下における「市民社会」的思考／行為様式，あるいは資本主義下における「男女共生」的思考／行為様式など）それ自体が，時代的／地域的な特性をもつ様式を生成する支配因である，ということなのである。したがって，下位の成層である経済因は，基礎的な条件を与えるという意味で「決定」因なのであり，アルチュセールの「最終審級としての」決定因あるいはマルクスの比喩表現であった「土台（下部構造）」）は，そういった意味で使用されるのだとコリアーは述べている（ibid. pp.60-1）。では一体，時代や地域における支配因の析出はどうするのかというと，まさにそこでCR論によるRDuあるいはRDiにおける生成メカニズムそれぞれ固有の探究が必要となるのであろう。

ちなみに彼は，（広義の）社会における階梯としての成層については，下位から順に経済，政治，イデオロギーなどの階梯をあげている。（ibid. p.43f.）[11] しかしMMCの各概念が成層論としてどう捉えられるか，すなわち経済因の内にさらに「成層の存在」があるのかなどについては語っておらず，次節において私見を提示しておきたい。

(5) 複線の視点

前章で紹介したように，ロバーツのバスカー／RDu批判はMMCの（双方向的な）循環 circular 運動の視点から，（一方向的な）線形 linear 運動の視点に対してというものであり，他方バスカーによるマルクス／MMC批判は，複線 multi-linear の視点から，単線 uni-linear の視点に対してというものである。ここでは，ロバーツからは「線形」，バスカーからは「単線」という批判が互いに為されているが，線形運動に対置するものとして，循環運動を認識論的循

環と存在論的循環とに分岐させ，前者はRDuにも見られ，また後者についてはバスカー『弁証法』全体における運動／変化の論じ方によるだろうとしてそれ以上の考察は留保としている。ここではバスカーからの，複線の視点に基づく「マルクス／MMCは単線の視点だ」という批判を少し詳しく見ておきたい。バスカーは，強くこだわるものではないと断りつつ，以下のようにMMCについて幾分厳しい調子で単線の視点が抱える問題点を提示している。

「……『資本論』第1巻第1章における商品の弁証法を起点に，最終的には『剰余価値学説史』における経済学説史の批判的検討，そして当然ながら自説の反射的位置づけへと展開していく。その本質は，前にも指摘したように，種々の興味深い地歴史的例証と社会誌的挿話がちりばめられてはいるものの，事前に道筋の決まった単線的なヘーゲル風の弁証法である。……（Bhaskar, R. 2008 p.347（式部訳 p.532）傍点は筆者）」

バスカーにとっては，この単線批判はMMCのみならず，「社会的全体性の他の水準の理論化」あるいは「社会的抑圧の他の次元の必要性の自覚」を，マルクスは最初からきちんと位置づけていなかった問題として主張しており，具体的には現代社会に至って種々様々に勃発しているジェンダー，民族・人種，エコロジー，宗教，などの課題について，経済・階級・生産／労働という単線の視点を超える，複線の視点あるいは複合決定の問題としてとり扱うことが必要であると論及している。（ibid p.348f.（同訳 p.534f.））　そしてこのバスカーの投げかけている論点については，マルクス理論に理解を示しつつCR論で社会科学方法論などを論じるセイアーやコリアーも賛同しているのである。（Sayer, A. 1984 /Collier, A. 1989）　以下の最終章ではMMCを通して考察しつつ，私見を加えた考査をしておきたい。

Ⅲ　マルクスの『資本論』の方法とリトロダクション／リトロディクション―複合決定と複線の視点に関わらせて

今まで見たCR論においてRDu（RDuI／RDuIIとがある）とRDiの両法，そしてRDiの方法に結びついている成層論を内含する複合決定やそれに関わる複線の視点，という複合性の問題を考察してきたが，これらはマルクスの『資本論』の方法（MMC）とはいかなる対応関係となるのか，そしてそのCR論的視点は別の角度から新たなMMCにおける展開を提示するのか，などの検討を加え私見を述べたい。以下，MMCの下向（抽象化／研究の途）における始点から終点へ，次には上向（具体化／叙述の途）における終点から始点への概略的な行程の記述に沿いながら，CR論におけるRDu／RDiや複合性などの見方と，それぞれ重なる点あるいは相違する点を対比し検討していく提示の仕方で表していきたい。

1．MMCの道程とCR論

(1) 下向における始点：（広義の）社会から

MMCにおける下向の出発点は，「人口」に集約される（広義の）社会であり，上向の終着点でもあるが，帰路の旅を終えたその社会は「多くの規定と関係からなる豊かな全体性（Marx, K. 1857-58（高木監訳 1959））」としての人口の姿をとる[12)]。まずは，下向に旅立つ時点で，（広義の）社会からどうして「経済的なるもの」が道程目標に選ばれたのかを考えてみよう。（この「経済の方法」と称せられる行程が，多くの場合「経済還元論／経済決定論」，また「単線の視点」などの評価に繋がっている）

まずは（広義の）社会の構成は，マルクスが『経済学批判序説』で表現している著名な「社会の物質的生活の生産様式（「経済」）」とそれが決定する「社会的（sozial），政治的，および精神的生活過程」として見ておこう。（後者の3過程をコリアーは「政治」，「イデオロギー」の2過程としているが）[13)]。

「経済」が土台であり，他の諸過程を上部構造とする「経済決定論」なのか，あるいはアルチュセールのように諸過程のどれかが時代の特徴を決める支配因となるが，そのどれかを決めるのが「経済」の最終的な決定因であるとする「最終審級としての経済決定論」なのか，いずれにしてもそれでは従来の「経済」による「単一決定論」であり，複合決定や複数の視点とは矛盾を起こすし，現代の新しい歴史展開を十分に説明はできないといわれてきた。しかし全くアド・ホックな，非複合状況下 disconjunctive での無関連な多数の（plural）作因による決定のような「複合性」では科学としての有効性に疑問が生じよう。本稿では前章の最後に考察した，CR 論の成層論を取り入れたコリアーの「垂直的複合決定」の考え方を（Collier op.cit.），この場面では採用したいと考える。

コリアーの捉え方では，（広義の）社会を CR 論の「階梯としての成層」から「経済的・社会的・政治的・精神的生活過程」という，それぞれが創発性を有する生成メカニズム／因果力をもった垂直的な諸成層の複合体／複合決定となる。では，なぜにその中で「経済」のみが「単一決定因」的性格を課されるのかというと，上記の垂直的成層の一番下位の階梯だからであり，この最下位の物質に近接した階梯の位置が，先のマルクスの表現によれば「物質的生活の生産様式」の役割を担うからであり，（広義の）社会の時代的・地域的特徴は因果諸力の複合決定（アルチュセールのいう「支配因」）によるとしても，それらの諸決定のために基礎的な条件を設定するものとなるからであろう。（ibid.） そうであれば，MMC における下向の始点に「経済」が選択された理由が理解できるだろう。この捉え方によれば，一方で全くの非複合状況下での多数決定論でもないし，他方で全くの単一な経済決定論でもない考え方となる。

また MMC における下向の始点とは，CR 論の RDi 法からも考察できることとなり，複合的な（広義の）社会を対象とし，「経済・（狭義の）社会・政治・精神的生活過程」のそれぞれ因果力を有する諸成層に分解し，その上で絞込みとして階梯のより下位である「経済」をまずは同定したということとなろう。さらに下向してその生成メカニズムの同定については，既知の説明できる理論（軌範的言明）が存在するのならば，その理論の妥当性を検証する場合は RDi の方法となり，そうではなくて新しい説明理論の探究に向かうのならば，RDu の方法を取るということになるのである。こう考えると CR 論の RDu ／ RDi については，通常いわれている MMC における下向に対応するのが RDu であり，上向に対応するのが RDi であるという比較論については正確ではないと考えられる。すなわち上記で見たように，下向においても RDu だけではなく RDi の方法も用いられているからである。

(2) MMC の世界：階梯としての成層性

次に考えるべき問題は「経済」すなわち経済総体，そしてその中における『資本論』の位置であるが，MMC と CR 論との対応関係において検討していきたい。

そこでは「経済」といわれる総体の世界を，CR 論とりわけ成層論としてどう把捉するのかである。まずは「経済」を「ドメインとしての成層」と考えるなら，生成メカニズム（実在的ドメイン）は『資本論』の世界（とりわけ第１部「資本の生産過程」）とされ，それが生成する事象（経験的／現実的ドメイン）は，『資本論』第２部「資本の流通過程」以降の「経済」の世界とされよう。そして生成メカニズムはおそらくは商品・貨幣・資本の循環過程とそこで産み出される剰余価値までを含む「各パーツ（Elder=Vass, D. op.cit. の表現）」の複合体，およびそれらの相互作用による「水平的」複合決定という構成とされよう。

しかし未完であった『資本論』が，もしも完成していたならばそれは「経済」総体を描いていたであろうし，やがては次の階梯である「（狭義の）社会」という新たな成層へと上向していたと想像するなら

ば，MMC は「経済」総体の方法でもあったわけなので，「経済」＝経済総体＝『(完成した）資本論』の世界と考えておきたい。その上で MMC が下向⇆上向という構成をとることから，「経済」すなわち『資本論』の世界を「階梯としての成層」として見る方が妥当であろうと思われる。なぜなら『資本論』を構成する重要な各要素を捉えるには，下位の成層が上位の成層を生成するが，しかし決して上位の成層は下位に全く還元されるものではなく（単に説明的還元がなされるだけで），特有の創発性を備える各々が因果力をもった成層であるという考え方が適当であるからである。ここから『資本論』の世界とは，複合的な生成諸メカニズム／因果諸力を有する諸成層からなる垂直的複合決定の構成として捉えられよう。そうであれば本稿では以降について，MMC は階梯としての成層の姿態によって考察していくのであるが，ただし成層論としての次のような留意点は設けておかねばならないだろう。すなわち成層は階梯として垂直的に複数あるだけでなく，それぞれの階梯に（より上位の，同位の，より下位の各階梯に）成層が水平的にも複数に存在する姿態をとるということである。

(3) MMC の世界の下向／抽象化：RDi と絞込み

さて具体的には，MMC において（広義の）社会から下向して「経済」すなわち『資本論』の世界に入ると，まずは「各資本の総体」として，それぞれ因果力を有する諸成層として複合的な各資本の具体的形態が存在している。それを分解して（MMC の下向／抽象化，CR 論では RDi），例えば生産資本（産業資本，第 1 部，以下 MMC における諸資本の出現は，上向／叙述していく順序であり，下向／研究とは逆になる），商品資本，貨幣資本（以上，第 2 部，第 3 部），商品取引資本，商人資本，利子生み資本，銀行資本（以上，第 3 部「資本主義的生産の総過程」）などなどがあり，それぞれ因果力がある創発性をもつ独自な資本という成層であり，またそれぞれを既知の理論（軌範的言明）によりその傾向性の説明は可能であり，それを生成している下位の階梯の成層も見出し得よう。

ここで複数の上位の諸成層から複数の下位の諸成層が存在するのならば，次に研究上必要な作業は，これら複数の諸成層においてどういった下向／抽象化をするか，その論理がいることとなる。CR 論の RDi でいえば，事象を複数の構成要素に分解した後，この複数の因果力を持つ構成要素のどれかに（単一もしくは複数の）絞込みをしなければならないが，どういった研究目的／前提仮説で抽象化あるいは絞込みの作業を行うのか，という研究の前提となる作業の論理がいるということである。

MMC でも CR 論でも共通の手法といえる抽象化には二通りあり，一つは複合的な対象から特定の具体的存在物を「操作により」分離して取り出す isolation 抽象化であり，もう一つは複合的な対象が共通にもつ普遍的な特性を「思考により」抽出する抽象化である。（Danermark, B. et.al. op.cit. p.69（佐藤 前掲訳 p.43））MMC のこの地点における下向／抽象化としては，前者の手法によるものであり，複合的な対象である資本総体の中から生産資本（産業資本）という具体的存在物をまずは先行して分離し取り出している。RDi でいえばまずは生産資本に絞込みを行ったこととなる。ではこの抽象化という分離あるいは絞込みの操作による作業は，どういった「論理（研究目的／前提仮説）」で行われたのかといえば，MMC では，資本制下における商品・貨幣・資本およびその複合体が内部に生み出す剰余価値を導出するという研究目的からであり，CR 論的にいえば資本制社会における下位の成層である，基礎条件としての決定因（生成メカニズム）を探究したいがゆえに，資本制における流通過程や交換過程に存在する資本（『資本論』では第 2 部／第 3 部に出現する）ではなく，生産資本（『資本論』の第 1 部に出現する）を分離する，あるいは絞込む論理としたのである。（見田 1963 p.186f.）そして生産資本からさらに下向する過程では，資本主義的生産の「総過程（第 3 部）」から資本の「流通過程（第 2

部)」と「生産過程（第１部)」という構成要素への分解と生産過程への絞込みを行い，次の下向で生産過程における資本に到達すれば，「絶対的剰余価値」と「相体的剰余価値」の生産という構成要素の分解と絶対的剰余価値の生産への絞込みを行い，さらに絶対的剰余過程の生産に至れば，「価値増殖過程」と「労働過程」という構成要素の分解と価値増殖過程への絞込みを行う，などがされたのであるが，この下向／抽象化あるいは RDi の絞込みの論理は，以上の研究目的に基づいた一貫した論理によるのである。そしてこの一貫した MMC の論理こそ，バスカーによって「単線の視点」であると批判を受けているのであるが，以降ではあらかじめ決定因そのものの考察をした後に，単線／複線問題について私見を加えたい。

(4) MMC における基礎条件としての決定因（基礎条件としての生成メカニズム）

絞込んだ生産資本における資本そのものへと下向してきたならば，そこでは（絶対的／相体的）剰余価値を中心とした過程が存在し，それを生成する貨幣，さらにそれを生成する商品へという『資本論』における下向の終着点に到達しひとまずは行きの道程を終える。さて，「経済」総体（すなわち『資本論』）の構成は垂直的な「階梯としての成層」の複合体であり，複合決定をしているとした。しかしながら（広義の）社会に，その基礎条件である決定因として「経済」総体が存在したのと同じく，今度は「経済」総体＝『資本論』の世界にも，それを生成する基礎条件としての決定因（基礎条件としての生成メカニズム）が存在するだろうし，それが何であるかが問題となるであろう。（ただし，ここでも「最終審級としての決定因」を問題にしているのではない）

（広義の）社会における基礎条件としての決定因は「経済」総体であったが，それが決定因とされた理由は，諸成層の中で一番下位にあり物質により近接しているからであった。それならば『資本論』においては，下向の終点にある商品こそ一番下位の成層であるから，基礎条件としての決定因は商品であるといえるかも知れない。しかし資本制社会という歴史的限定がされるなら，歴史貫通的に存在もする商品一般の概念では正しくなく，歴史的に限定された資本制における剰余価値こそが最も基礎条件であるといえるか，あるいは剰余価値を直接に生成する資本が基礎条件といえるか，のようでもある。(cf. Arthur, C. §1 in Moseley, F. and Campbell, M. (eds.) 1997）しかしこの把捉では非複合状況的な多数決定 disconjunctive plural determination の説明に陥ってしまう欠点があり，より整合化しうる考え方として，商品－貨幣－資本という循環する成層の複合体と，その複合体の過程内部で持続的に生み出される剰余価値という複合状況的な多重決定 conjunctive multiple determination の把捉がより妥当であろう。その考え方こそ資本制社会下での「経済」(『資本論』の世界）における循環する垂直的複合決定因（基礎条件としての生成メカニズム）であるとしたい。(「連言的多重性 conjunctive multiplicity」と「選言的多数性 disconjunctive plurality」の考え方を使用。Bhaskar, R. 2008 p.348（式部訳 p.534)）

さて，『資本論』における決定因を同定した上で，次のような留意する点を示しておきたい

A. 資本から貨幣，商品への下向は，CR 論でいえば RDi の絞込みであったし，各成層（分解された構成要素）については既知の軌範的命題で説明できたであろう。しかし既知ではない決定因を同定する作業は RDu の方法であっただろうし，そこで発見された剰余価値などの軌範的命題は，今度は上向において，かつて下向の過程で RDi により分解されて説明されていなかった構成諸要素（絞り込まれなくて残されたものも）をも説明し得るのであり，上向の過程で残されていた複合状況が説明されていくといえよう。

B. 成層の中には，例えば商品のように，現実の資本制における事実として経験できるという側面と，自らを生産するはずの資本という前提をまだもたな

い「一般的 general（超歴史的）」概念でしかないという側面をもった，超事実的 trans-factual な（事実であるかないかを超越した）実在がある。（木田 2016A ／ B）

C．MMC においては，下向の道程は商品で終着点を迎えたとされるが，抽象化の作業はさらに行われており，商品については使用価値と価値に抽象化（分解）され，もはや思考でしか抽象化できない RDu ／ RDi となっている。さらに交換価値の抽象化では，遂には価値の基準といわれる「社会的に必要な労働時間」に至れば，労働者である人間／エージェント agent の世界が登場し，同じく使用価値の抽象化においても，やはり人間の「欲望」という世界へと辿りつくのである。この移行を CR 論から見れば，階梯としてのより大きな成層である（広義の）社会という階梯から，より下位の人間という階梯への成層間移行ということとなろうが，経済的なものを含む（広義の）社会と人間というより大きな「階梯としての成層」間の問題については，また稿を改めて考察しなければならない今後の課題であろう。（ちなみに『資本論』は上向して最後は階級で終了する未完作品なのだが，この階級概念[14] も（広義の）社会という成層から人間という成層への架橋ともなる存在であり，ここでも同じく大きな成層間移行の課題が潜在しているが，今後の検討としたい）

2．MMC と CR 論における残された論点

(1) 単線／複線の論点

前節で考察した MMC の道程において重要なことは，『資本論』の決定因といえる商品・貨幣・資本および剰余価値という複合体／複合決定から上向していき，各資本の総体にまで帰ってきたときには，そこでは RDu で既に獲得している決定因としての概念である「剰余価値（利潤へと形態変化している）」によって，その各資本（流通／交換過程の諸資本）への配分などの視点から，各資本総体における諸形態の複合状況に対する説明が可能となっている。 ここから MMC が「単線」の視点しか持たないというバスカーの批判は，それ自体が「単線」的視点による批判ではないのかと思われるのである。すなわち MMC の方法，とりわけ一貫して例えば「剰余価値」という「単線」の視点で描かれるという手法の目的が，実は資本制社会における各資本諸形態の複合状況／複合決定の様相を全体的／総合的にある種の一貫性を有しつつ同定し説明するためであったのではないか，すなわち，ただ単に非複合状況的な各資本諸形態とそのばらばらな多数の諸決定 disconjunctive plural determination を個々の部分的様相を記述するためだけのものではなくて，MMC の方法とは，複合状況的な多重決定 conjunctive multiple determination を同定し説明（複線の視点）するために，必要な単一の決定因への同定作業（単線の視点）であったといえるのではなかったのか，と考察し得るのである。（Bhaskar, R. 2008（式部訳））

ただし，『資本論』が書かれた当時と，同じ資本制社会でも現代とは大きい変化がある。したがって，MMC が生産（産業）資本における剰余価値などの決定因を同定するという「単線」の視点を，まずは設定した時代と現代との共通性と相違性から考慮しなければいけないだろう。例えば「資本」総体を分解した上での RDi の絞込みは，当時なら生産資本であったのだが，例えば恐慌の発生を考えるとすれば，今日なら『資本論』2 部や 3 部の「銀行資本」「利子生み資本」など「信用」「投機」への視点の移動を必要とするだろう。けれどもいうまでもないのだが，商品・貨幣・資本の複合体が生み出す剰余価値の視点は基礎条件である決定因として今でも共通な視点として欠かせないだろう。そうであってもジェンダーや，人種・民族などの多くの複数の視点が指摘されているが，例えばエコロジー的な視点として経済因への絞込み以前に，自然的世界や社会的世界における経済因以外の「複線」の視点を必要とすることは確かであろう。けれども，MMC における中心の基礎条件的な決定因が含有している「剰余価値」という視点は無論の事，生産における人間と自然の交

換関係や制御－彼制御関係，あるいは経済因より上位の階梯にある政治因の成層における，国家あるいは国家資本／社会資本の視点も必要なのであり，さらにはグローバルな資本（多国籍資本）の視点から地球環境／資源へのアプローチなど，まさしく複合的な複線の視点を要することはいうまでもないだろう。その意味ではバスカーが提起する複線の視点については肯定し得るものであるのだが，あえて留意点を繰り返しておくならば，MMC の時代と今日の時代とが同じ資本制社会である限り，MMC が獲得した視点を内含させた複線の視点が必要なのだということであろう。

(2) 線形／循環運動の論点

最後に，残された双方向的な循環運動か一方向的な線形運動かの論点を検討しておこう。バスカーの複合決定やそれと関わる複線の視点および成層性の考え方を使うことにより，MMC においても単純な経済決定論でない姿が映し出せることが伺われ得るが，バスカーの RDu の方法が，循環運動的でないというロバーツの批判に関しては，バスカーの『弁証法』の全体を通じた運動／変化の捉え方を理解した上で論評したいがそれについては今後の課題であると前述した。ただしバスカーの成層論を循環論でも捉えるとするならば，検討が必要な留意すべき論点を次に提示しておきたい。

とりわけ階梯としての成層の下位から上位への階梯の姿態についてであり，ここで双方向的循環か一方向的線形かは重要な問題となる。MMC において先述したように商品・貨幣・資本および剰余価値などの鍵概念は階梯としての成層と把捉されたのだが，認識論的には当該の諸概念は抽象⇆具体の循環運動として把捉できる。そしてこれら諸概念である商品・貨幣・資本およびそれが生み出す剰余価値は，MMC の決定因としての複合決定の構成であるともした。するとこれら下位の階梯から上位へと重層的に構成される諸成層が，今度は最上位の成層が次には最下位へと連なる存在論的な循環運動の姿態をとらねばならないのだが，単なる下位の階梯から上位へと成層が堆積していくのであれば，それは存在論的には一方向的な線形運動の姿態となり，MMC でいう双方向的な循環運動とならない。すなわち MMC の大きな特徴であった資本制社会の再生産さらには形態転換の運動（循環運動）を，CR 論の成層論では存在論的には把捉できないのではないか，という問題が生じるという論点が残るのである。

本稿の最後に，CR 論の成層論が存在論的な循環運動として把捉するために検討がなお必要な論点を列記しておこう。

A. 各成層を垂直的に下位の階梯から上位の階梯への一方向の重層と捉えないで，商品から資本までの成層を水平的な循環をなすセット（群）として捉えれば叙述は可能である。しかし創発性をもつ下位の成層からそれが生成する上位の成層という，階梯としての成層論がもつ論理一貫性を保持し得るのかは要検討の課題であろう。

B.「時間的変化」を成層論に付加する考え方がある。これは社会（構造 structure）と人間（エージェント agent）の二つの因果力を有する成層を「分析的二元論」で捉えたアーチャーの視点である。すなわち過去の人間が生成した社会が，現在の人間への先行的決定因となっており，次には現在の社会に規定された現在の人間が，新しい未来の先行的決定因となる社会を生成するという把捉である。ここから時間的変化による決定因となる両成層の上位と下位との移行，すなわち時間差による双方向的な社会と人間との，成層間における循環運動が存在するという考え方となる。したがって MMC の双方向的（商品⇆資本）な循環運動を時間的変化とすれば，CR 論の成層論による把捉は可能となる。（アーチャーの形態生成論については，Archer, M.S. 1995（佐藤訳 2007））しかしこの考え方では，下位の成層が生成した上位の成層が互いに創発性を保持しつつ，時間的変化で移行して逆に上位の成層が下位の成層を生成するのか，という上記 A. と同じ要検討の課題が残る。これらは単純に各成層間の「作用⇆反作

用」として考えればよいのかも知れないが，いずれにしても階梯としての成層論の「下位」「上位」という考え方との論理一貫性が問われよう。

C. 物理学の世界では常態であるかも知れない，「曲がった空間」という 4 次元的な空間論から，CR 論の階梯としての成層論を見るならば，上位の成層による下位の成層の生成とか，あるいは上位の成層の次に下位の成層が重なるとか，上位の成層の終点が下位の成層の始点とつながるとかの「循環論」を，階梯としての成層の姿態に見ることが可能ならば，CR 論の諸成層における循環運動論が存在し得る。しかし，曲がった空間という「物理学的」概念が我々の今生きている地球の中の社会的世界に適用できるのか，という幾分晦渋な要検討の課題がやはり残るだろう。

いずれにしても，CR 論の複合決定論や成層論は MMC をより柔軟な理論的展開にし得る射程を潜在しているようであり，なお残る諸論点も含め新しいしなやかな思考による展開を志向していきたいものである。

注

1）　前稿（木田 2016A また2015A も参照）では，マルクス理論家で CR 論に理解を示す 3 タイプを紹介した。Brown, A., Fleetwood, S. and Roberts, J.M. ら 3 名の編著（2002）の §1 からを参考に，1 タイプは，マルクス理論は CR 論に学ぶべきというもの（Fleetwood, S. §§1），2 タイプは，前稿で取り上げた，マルクス理論は CR 論を参考にはするが，学ぶものはないというもの（Roberts, J.M. §§2），3 タイプは，両論が互いに学ぶべき，というもの（Brown, A. §§3）である。

2）　CR 論の成層性については，私なりに 3 つのドメインによる深層 depth の世界を「ドメインとしての成層」とし，下位から上位への階梯が創発性を有して重層化される世界を「階梯としての成層」とした。後者は位階とか階層とかの呼び方もされる。

3）　循環論については，前稿では抽象⇆具体という認識論的循環運動と，商品⇆資本という存在論的循環運動とを明示的に分岐させてはいなかった。

4）　RDuII を，バスカーは思考による抽象化や認知的素材などによる「モデル構築」で同定するとしているが，Danermark, B. らによる書（Danermark, B. et.al. 1997（佐藤監訳 2015））では，リトロダクション（遡及）RDu とは別に「アブダクション」という想像力／創造力によって仮説推論する方法を提示している。

5）　ただし，前稿では RDuI については，認識論的循環論と存在論的循環論とを分岐させて比較していないので，前者は同一であるが，後者の比較とそこからの検討課題については，本稿の最終文面で考察を行っている。

6）　バスカー『弁証法』の「解説」として，Bhaskar, R. with Hartwig, M.（2010）が参考になるが，そこではマルクス理論の弁証法（的唯物論）を凌駕する意図はなく，主体についてより深めたいこと，そして CR 論の弱点であった運動／変化の理論について発展させたいこと，などが当著『弁証法』の課題だとバスカーにより語られている。

7）　バスカーは，他に像 images，模写 copies，撮影 photographs という隠喩があるとして，「反映された」対象物には，①直接形態と，②内面的／基礎的本質とがあるが，反映は「②を視角から遠ざけ，①の事例のみを浮き立たせる」と批判する。

8）　ただし，バスカーは分岐させていないが私は RDu を，抽象⇆具体の方法としての RDuI と，仮説であるモデル構築の方法（アブダクション 前注の 4）を参照）としての RDuII の二つに分けている。（木田 前稿）

9）　経験主義的手法では，規則的で持続的な類似の現象を「法則」としている。しかし，CR 論だと法則は，経験的ドメイン（あるいは現実的ドメイン）における「閉じた系」でのみ生じる事象として，実在的ドメインにおける「開いた系」で事象を生成させるメカニズムについては，「傾向性 tendency」（ただしセイヤーでは，liability の語を使用，Sayer, A. 1984）と呼び，法則とは見れないとする。ただし，自然科学における実験は「閉じた系」を人工的に設定できるともする。私は社会

科学では，研究上で作成された理論的意味での「法則」はあり得ると考えるが，実践の世界ではこの法則は傾向性としてしか存在しないことについては同意する。

10） 注の２）で解説したように，三つのドメインを含む「ドメインとしての成層」は，無限に存在する「階梯としての成層」の各成層の内にある，下位階梯の成層により生成されそれ独自の「創発性」をもつ一つの成層であり，やはり上位階梯の成層を生成していくのである。また下位の成層は，上位の成層を一方的に「還元」した存在なのではなく，上位の成層への「説明的な還元性」をもった存在なのだといえる。

11） バスカー『弁証法』における（広義の）社会の捉え方は，まずは「社会的立方体」として，①自然との物質的交流，②間主観的・内主観的（対・内人格的）関係，③社会的関係，④行為者の主観性，をめぐる平面がある。（2008 p.160（訳 p.257））また成層化については，「二種類の上部構造形成」として「上からの重ね合わせ（モデル A）」と「内からの重ね合わせ（モデル B）」を上げ，具体的に現代ではモデル A として，「グローバルな資本主義経済，国民国家，市民社会，家族，女性の権利」，モデル B として，「資本主義的生産様式，国際的・国内的・社会的・政治的・経済的・軍事秩序的，（グローバル化した）市民社会，個別的な国民社会，特殊的な家族形態」が示されている，（ibid. p.162（同訳 p.259））これら成層の具体化についてはさらに今後に考察する課題であろう。

12） 全体性についてバスカーは，ヘーゲルの全体性は「閉じた系における（開いた系ではない）全体性である」と批判しており，マルクスのこの全体性についてはまだ「部分的全体性であり」，弁証法的全体性ではないとしているが，これもなお考察する今後の課題である。もっともバスカーは，マルクスの弁証法的方法については大体は評価しており，実在論的であると同時に，科学的，関係的，批判的，体系的な弁証法であり，とりわけ『資本論』は「資本主義の諸矛盾を……特定の構造的な意味で構成的な矛盾にまで遡って分析した」として，具体的には「商品の使用価値と価値との矛盾，商品に体系化された労働の具体的有用的相面と抽象的相面との矛盾」（ibid. p.346 同訳 p.531-3）などを摘出してる点などについて肯定的な評価をしている。

13） マルクスが（狭義の）社会的を sozial で表して，（広義の）社会的 gesellschaftlich とは異なる意味をどう表そうとしたのかは古くからの課題である。（木田 1979/1980） ただ成層論で捉えれば，「経済」という成層（基礎条件としての決定因）の上位にある「社会的 sozial 生活過程」すなわち例えば「市民社会」としての成層とすれば，「経済」など他の成層との関連性が「説明的還元性」および「創発性」の発想を入れることにより，今までとはかなり異なる豊かな概念的姿態を帯びるだろう。

14） CR 論を取り入れて階級概念を検討したものとして，拙稿（木田 2015B）があるが，人間／エージェントと社会／構造とを，別個の実在として捉える「階梯としての成層」論（「分析的二元論」）との関わりでは，当稿での考察は不十分であるのでさらなる今後の課題である。

引用文献／参考文献

Archer, M.S. “Realist Social Theory: the morphogenetic approach” Cambridge University Press, 1995（佐藤春吉訳『実在論的社会理論―形態生成論的アプローチ―』青木書店，2007）

Bhaskar, R. “A Realist Theory of Science” Verso, 1975（式部信訳『科学と実在論』法政大学出版会，2009）

Bhaskar, R. “The Possibility of Naturalism: a philosophical critique of the contemporary human sciences”Harvest Press, 1979（式部信訳『自然主義の可能性―現代社会科学批判―』晃洋書房，2006）

Bhaskar, R. “Scientific Realism and Human Emancipation” Verso, 1986

Bhaskar, R. “Dialectic: the pulse of freedom” Routledge, 2008（式部信訳『弁証法―自由の鼓動―』作品社，2015）

Bhaskar, R with Hartwig, M. “The Formation of Critical Realism: a personal perspective” Routledge, 2010

Brown, A., Fleetwood, S. and Roberts, J.M. (eds.) “Critical Realism and Marxism” Routledge, 2002

(Archer, M.S. et.al. (eds.) “Critical Realism: interventions”)
in this book
§1 Brown, A., Fleetwood, S. and Roberts, J.M. (eds.) ‘The Marriage of Critical Realism and Marxism: happy, unhappy or on the rocks?’
in this chapter
§§1 Fleetwood, S. ‘Critical Realism: augmenting Marxism’
§§2 Roberts, J.M. ‘Marxism does not Require the Services of Critical Realism’
§§3 Brown, A. ‘What Contemporary Marxism can Learn from Critical Realism’
§12 Roberts, J.M. ‘Abstracting Emancipation: two dialectics on the trail of freedom’

Collier, A. “Scientific Realism and Socialist Thought” Harvest Wheatsheaf Lynne Riener Pub. 1989

Collier, A. “Critical Realism: an introduction to Roy Bhaskar’s philosophy” Verso, 1994

Danermark, B. et.al. “Explaining Society: critical realism in the social sciences” Routledge,1979 (Archer, M.S. et.al. (eds.) “Critical Realism: interventions”)（佐藤春吉監訳『社会を説明する』ナカニシヤ出版，2015）

Elder=Vass, D. “The Reality of Social Construction” Cambridge Univ. Press, 2012

Lawson, T “Economics and Reality” Routledge, 1997（八木紀一郎監訳『経済学と実在』日本評論社，2003）

Marx, K. “Grundrisse der Kritik der Politischen Oekonomie” Dietz Verlag, 1857-58（高木幸二郎監訳『経済学批判要綱』大月書店，第１分冊，1959）

Marx, K. “Das Kapital: kritik der politischen oekonomie” Dietz Verlag, V.1:1867, V.2, V.3 (Engels, F.): 1885, 1894（岡崎次郎他訳『資本論』大月書店，１巻，２・３巻：1968）

Moseley, F. and Campbell, M. (eds.) “New Investigations of Marx’s Method” Humanities Press, 1997
in this book
§1 Arthur, C. ‘Against the Logical-historical Method: dialectical derivation versus linear logic’

Sayer, A. “Method in Social Science: a realist approach” Macmillan, 1984 (2nd. 1994)

木田融男「“社会”概念をめぐって（上）（下）」『新しい社会学のために』19号／20号，1979／1980

木田融男「批判的実在論とリトロダクション―マルクス理論との関連で―」立命館大学社会学研究科：先進プロジェクト研究『中間報告レポート』，2015A

木田融男「格差社会と階級理論―批判的実在論を通して―」櫻井純理他編著『労働社会の変容と格差・排除―平等と包摂をめざして』ミネルヴァ書房，2015B

木田融男「批判的実在論とリトロダクション―社会科学方法論の比較から―」『立命館産業社会論集，批判的実在論特集』第51巻第４号，立命館大学産業社会学会，2016A

木田融男「批判的実在論とリトロダクション―覚え書き―」立命館大学社会学研究科：先進プロジェクト研究『中間報告レポート』，2016B

見田石介『資本論の方法』弘文堂新社，1963

Critical Realism and Retroduction/Retrodiction : With the Complex Determination and the View of Multi-Linear

KIDA Akio [i]

Abstract : I have been studying about a scientific method of the retroduction (RDu) which identifies the essential mechanism that generates phenomenal events on critical realism (CR), comparing with Marx's method in *Capital* (MMC), and my next subjects are to research the retrodiction (RDi) connected with RDu and to clarify the complexity/the complex determination and the view of multi-linear which are premises on RDi. Then I have to compare these methods with MMC and especially try to estimate how MMC overlaps with the conjunctive theories in CR.

Keywords : retroduction/retrodiction, generative mechanism/causal power, normative statement, (horizontal/vertical) complex determination, view of uni-linear/multi-linear, linear/circular movement

i Professor Emeritus of Ritsumeikan University